

[学術資料]

嘉義農林学校学生の戦争体験

Experiences of the students called up for service at CAFPS

小野 純子

Junko ONO

Studies in Humanities and Cultures

No. 28

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 28号

2017年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2017

[学術資料]

嘉義農林学校学生の戦争体験

Experiences of the students called up for service at CAFPS

小野 純子
Junko Ono

1. 聞き取りの背景・目的・意義
2. 卒業生への聞き取り調査
3. まとめと今後の課題

要旨 本稿では、日本植民地時代の台湾、嘉義農林学校（嘉農）学生の戦争体験に注目し、聞き取り調査を実施した。嘉農は野球で名高い学校であり、これまで「野球」、「農業」以外で語られることは少なく、特に戦後の台湾における台湾人動員研究で盲点となっていた学生らの戦争体験については、学生らの一部が一方向的に言葉を発するのみで注目されることがなかった。本稿では、これまで重視されることが少なかった地方都市の学生動員について聞き取りを中心に調査することで、台湾人動員研究の中で抜け落ちていた、地方学生の動員から空白を解くことを目的としている。本稿はその一助となる調査結果を報告するものである。

キーワード：台湾、嘉義、植民地、学生動員、戦争体験

1 聞き取り調査

1.1 背景・意義

本稿では、学生として動員され、戦争体験をした嘉農第24期（1942年入学、1946年卒業）の卒業生に聞き取り調査を実施した。まずは一事例のみを検討する。嘉農第24期の学生らは、終戦間際に「嘉農隊¹」として動員された過去がある。

1990年代より台湾において、元台湾人日本兵に関する口述史の研究が盛んに行われるようになった。これらの口述史の対象者は主に、志願兵、元軍属、高砂族であった。そのため、戦争末期に動員された台湾人（徴集兵、学生兵）の口述は比較的少ない。本稿において筆者は、特に嘉義地区

¹ 「嘉農隊」とは、嘉義農林学校の学生を中心に編成された特設警備部隊である。しかし、学生によって編成された学徒特設警備部隊に関しては未開拓であり、その実態は不明だ。

の学生に注目した。近年、映画『KANO²』の公開以後、嘉義地区の歴史が注目されているが、学生動員については、先行研究でも明らかにされておらず、嘉義地区は盲点となっていた。これまでの台湾の当該研究では、先にも述べたように、研究の対象が志願兵や軍属（通訳や、戦地で部隊への野菜供給を行った台湾農業義勇団）、高砂族（高砂義勇隊）に集中し、戦争の実態よりも「志願をした」、「志願して中華民国やその同盟国と戦った」という事実が重要視されていた。また研究が大都市（台北、台南、高雄等）に集中しており、台北、台南、高雄等に比べ都市としての規模が一段下がる嘉義のような地方拠点都市は重視されることがなかった。地方学生の動員は歴史研究において空白であった。特定の事象を取り上げてきたことで、全体像が見えなくなっているのだ。これまでに明らかにされていない地方学生についての調査は、日本の総動員体制末期の姿を考察する上で重要であるといえる。以下に、嘉義農林学校の歴史を振り返る。

嘉義農林学校とは、現在の国立嘉義大学の前身であり、その略称が嘉農(KANO)である。1919年、台湾人に対する中等教育の拡充が図られ、第一次台湾教育令が制定された。これに伴い同年、実業学校として、台湾公立嘉義農林学校が設立された（1921年に地方制度改正に伴い、台南州立嘉義農林学校と改称）。1922年の第二次台湾教育令によって日台共学が始まった後、少しずつ日本人学生が増加するものの、台湾人学生は最後まで多数派を保っていた。校地は、嘉義山子頂、現在の嘉義高商の位置にあった。修業年限は当初は3年で、農・林の両科を設置し、1、2年生ではコース分けをせず、3年生からコース分けをした³。設立当時は、嘉義庁庶務課で視学⁴だった藤黒總左衛門が臨時で1か月間、校長業務を兼任し、1919年5月、正式に熊本県立球磨農業学校から柳川鑑蔵を迎えた⁵。1945年までに柳川を含め8名が校長業務についた。8名のうち、半数は札幌農学校もしくはその後身である東北帝大、北海道帝大の出身者であった。

嘉農は、日本人が台湾人を育て、嘉南大圳と阿里山林場⁶の開発に従事させるための教育の場であり、台湾全土の農業学校の先駆となり、台湾の農業に貢献した⁷。台湾の林業、農業を支えていた。

上にも述べた通り1922年、第二次台湾教育令が公布され、日台共学が推し進められたが、その実態は差別的な民族別入学定員割当が行われ、台湾人の中等教育以上の進路は著しく狭かった。台湾人の進みえた道は、台北二中、台中一中、嘉義農林、台南二中、高雄中学などに限られており、実業教育での台湾人の学校としてはここが長らく唯一無二の存在であり、限られた中で重要な進

² 1931年嘉農が甲子園に出場し、準優勝をした実話を描いた2014年の台湾映画である。野球を通して民族を超えた友情を描き、台湾だけではなく日本でも評判となった。

³ 謝濟全(2009)『山子頂上的草根小紳士 日治時期嘉義農林學校之發展』 稻郷出版社 p. 111。

⁴ 台湾總督府職員録系統 2016年4月11日閲覧。

⁵ 李明仁 吳愼德 (2009)『椰影・金穗・野球情』國立嘉義大學 98年度校慶暨嘉農創校 90年記念特刊』國立嘉義大學校友會 p. 231。

⁶ 嘉南大圳とは、1930年に竣工した当時台湾最大の農水施設であり、重要な水利工事の一つである。これにより、嘉南平原は台湾最大の穀物地帯となった。統治時代、阿里山は台湾でも屈指の林場であった。統治時代に台湾の林業を開発するため、阿里山に森林鉄道が完成した。鉄道の完成後、阿里山では林業の開発が盛んになった。

⁷ 前掲 李明仁 吳愼德 (2009) p. 230。

路かつ拠点校であった⁸。嘉農は、台湾人における中等教育の一つの場であり、台湾産業を支える絶対の存在であった。

1.2 聞き取りの目的

本稿ではこれまでの台湾における人的動員研究の中で盲点となってきた「地方」、「学生」を取り上げることで、戦争末期台湾防衛体制の中の学生動員に関して実態を明らかにする。その一例とし、台湾人教育の一つの場であった嘉義農林学校の生徒に注目し、聞き取りを実施した。都市としての規模が一段下がり、これまで重視されることが少なかった嘉義の、終戦間際に動員され、兵籍もなく実態も不明であった学生部隊に関して調査をすることで、「地方」「学生」動員研究の空白を埋めるを試みる。

統治下台湾における学生動員は、台湾の台湾人動員研究の中心的課題であった「志願兵」の中での学生の志願という形を除くと大きく、①学徒出陣②徴兵制度③学校単位の動員と3つに分けられる。しかしその実態は不明な点が多く、明らかにされていない。対象者は、③に値するが、③学校単位の動員⁹は台湾史を語る上でも留意されず、「学徒兵」という一つの括りで述べられてきた。

台湾における学生動員については、高橋英男（1998）『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』において詳しくまとめられているが、高橋では本稿が対象とする嘉義地区と台東地区のみ触れられておらず、当該地域の学生動員状況は不明である。高橋（1998）では、調査の際に約50の学校に、同窓会を通じて調査依頼をしているが、その回答も日本人の多かった学校からの回答が大部分を占め、嘉義地区の学校からは回答を得られていないようである。

研究の抜け目となっていた地方拠点都市での、これまた盲点となっていた学生動員について聞き取りを中心に調査することで、台湾人動員研究の中で欠けていた、地方学生の動員からその空白を解くことを目的としている。本稿はその一助となる調査結果である。

以上から本稿では、「嘉農隊」と呼ばれる嘉農の学生らで編成されていた地方学生部隊の実態を明らかにすることを目的として、聞き取り調査実施した。

1.3 嘉義農林学校における関連文献

同校はスポーツ史、特に野球に絡めて論じられることが多い。台湾野球を研究した謝仕淵氏の博士論文「帝國的體育運動與殖民地的現代性：日治時期台灣棒球運動的研究」（2011）や博士論文

⁸ 嘉義農林学校より上級の農林業教育機関として、高等農林学校（後の台北帝国大学農林専門部）や台北帝国大学理農学部があったが、台湾人の入学枠は定員の5%程度、すなわち1学年に2~3名ずつに過ぎなかった。

⁹ 学校単位の動員は、1945年3月20日、1945年4月25日の二回実施され、学校もしくは学年で召集された学生らは、防衛召集方式をもって学校単位もしくは周辺学校との合同で学徒特設警備隊を編成した。台湾では、1945年、台湾全島の大学、高校、高専、師範学校、中学（高学年）の男子生徒が一斉に召集を受け、概ね学校単位で学徒特設警備部隊に服することになった。高橋英男1998『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』美巧社 31頁を参照。

をベースに詳しくまとめた『國球誕生前記：日治時期臺灣棒球史』(2012)が代表的である。また、謝氏は映画内でも登場する1931年甲子園に台湾代表として出場した蘇正生氏をはじめとし、日本統治下の台湾において教育を受けた野球経験者への口述記録『日治時期臺灣棒球 口述訪談』(2012)もまとめている。台湾で口述歴史研究が盛んになっていくのは、1990年代からである。嘉農の後身である嘉義大学でもその頃から、卒業者を対象とした口述歴史研究が盛んとなった。主なものとしては、台湾嘉農校友会、台湾嘉大校友会が出版している、『嘉農人』(1997-)、国立嘉義農業專科學校校友会が出版している『嘉農口述歴史』(1993)、国立嘉義大学台湾文化研究中心出版の『嘉大口述歴史—日治時代』編(2007)や『嘉大口述歴史—師範大学』編(2008)などがある。最新のものでは、嘉義農林 KANO 棒(野)球部 OB 会出版の『永遠的嘉義農林/嘉義大学 KANO 棒(野)球魂』(2014)や劉萬来『一個老 KANO 的回憶 大林之子劉萬来自叙』(2015)などがある。謝濟全『山子頂上的草根小紳士：日治時期嘉義農林學校之發展』は嘉農についてまとめ上げられた一冊である。これらは、嘉義農林の特に野球に関して論じたものは多いが、学生の戦争への動員については既述が少ない。

2. 卒業生への聞き取り調査

2.1 対象者

—対象者の情報—

蔡清輝さん

1928年生まれ

台湾・嘉義県・新港出身

嘉農第24期学生

命部隊¹⁰に所属

蔡清輝氏を対象者として選定した理由は、以下である。

- ・本稿のテーマが対象とする学年の卒業生である
- ・「嘉農隊」に所属していたと自ら発している人物の一人である
- ・過去に日本政府に対し兵籍を求めるなど、自身の兵隊経験に対し、積極的な行動をしている

筆者と対象者である蔡清輝氏とは、2015年4月に台湾国立嘉義大学で実施された「2015 棒球口述歴史研習營¹¹ (口述歴史練習プログラム)」で出会った。当日、蔡氏は貴重な語り部として口

¹⁰ 「命」とは、第71師団の文字符である。満洲で南方進出に向け、訓練に励んでいたが、満洲から台湾に転入して終戦を迎えた。基隆上陸後、司令部を統括範囲である台中から嘉義の間の斗六に置き、台中州南部と嘉義の線に防衛陣地を構築することとなった。(台中歩兵第一聯隊史編集部(1988)『台歩一史「軍旗はためくところ」』534頁より。)

¹¹ 2015 棒球口述歴史研習營に関しては、以下に詳しい。

http://www.ncyu.edu.tw/NewSite/news3.aspx?news_sn=2477&pages=4 <http://jasyou.wixsite.com/ncyuohc>

述練習プログラムに参加されていた。戦後 70 年以上経ち、動員された学生らも現在 90 歳前後であり、聞き取り調査が可能な対象者を見つけることは容易ではない。蔡氏は以前より、上述した校友会誌等で積極的に嘉農について語っている語り部である。蔡清輝氏の語りは、『嘉農人』

（1997-台湾嘉農校友会、台湾嘉大校友会出版）に度々記述されており、『永遠的嘉義農林/嘉義大学 KANO 棒(野)球魂』（2014 嘉義農林 KANO 棒(野)球部 OB 会出版）でも「時空を超越した私の嘉農精神体験記」を載せている。また、蔡清輝氏が中心となり、第 24 期卒業生自費出版（非売品）の『私たちは嘉農第二十四回卒業生 私たちの奮闘物語シリーズ』が 3 冊書かれている。記述内容は母校（嘉農）についての概要や、野球部の歴史、監督、嘉農精神についてなどが大部分を占めており、本稿の調査内容と重複する箇所はわずかである¹²。参考までに以下に「時空を超越した私の嘉農精神体験記」の目次を記す。

「時空を超越した私の嘉農精神体験記」¹³

第一章：はじめに

第二章：「KANO」という字義の解釈

第三章：私の生い立ちと嘉農との因縁

第四章：嘉農精神の神髄

第五章：嘉農精神はこうして鍛えられた

第六章：嘉義農林の大記録と沿革

第七章：戦前は強かった「天下の嘉農」野球部

第八章：いばらの道辿った戦後の嘉農野球部

第九章：嘉農野球発展に貢献した功労者

第十章：終わりに

2015 棒球口述歴史研習營（口述歴史練習プログラム）終了後に、個別で蔡氏とお話しをしていたところ自身の兵隊経験を語ってくださったので、その後、直接電話等でやり取りし、ご自宅での聞き取り調査を承諾いただいた。次項より、調査の内容について記載する。

2.2 聞き取り調査

・第 1 回聞き取り調査

日時：2016 年 3 月 19 日

場所：台湾・嘉義県・新港 蔡さん自宅

所要時間：1 時間半

使用言語：日本語、中国語（台湾語もあり）

¹² 本稿と重複する内容も書かれているが、記述の中で触れられている程度である。

¹³ 蔡武璋(2014『永遠的嘉義農林/嘉義大学 KANO 棒(野)球魂』嘉義農林 KANO 棒(野)球部 OB 会出版 36 頁。

対象者：蔡清輝さん（奥様同席）

訪問者：小野純子、江玖嬢

・第2回聞き取り調査

日時：2016年4月12日

場所：台湾・嘉義県・新港 蔡さん自宅

所要時間：1時間弱

使用言語：日本語、中国語（台湾語もあり）

対象者：蔡清輝さん（奥様同席）

訪問者：小野純子

聞き取り調査は、筆者が事前に質問項目を準備し、それにお答えいただく形で進めた。内容は、蔡氏の生まれから学徒兵体験に関するものであり、筆者の最も関心の強い「学徒兵」を中心に質問した。調査では、主に日本語を使用した。事前の対象者調査で対象者の日本語能力に不安があったため、聞き取り調査項目表に中国語訳をつけて、印刷し（文字フォントを3倍にして印刷）、実施した。実際の調査は、大部分は日本語で行われたが、一部中国語や台湾語も使用した。

聞き取り調査は、2回に分けて実施し、2回目は1回目に聞き取った内容の確認作業であった。その際、新たに得られた証言箇所は、筆者による下線部分である。

質問は10項目であり、以下、選定理由である。聞き取り調査の一番の目的は、地方学生の動員の実態を明らかにすることであり、本稿においては下記質問項目にある「嘉農隊」が大きな手掛かりとなる。

①基本情報の確認

- ・年齢、出身などの基本情報
- ・当時、台湾人としては比較的珍しかった中等教育機関へ進学していたのでその進学理由と将来設計に関する質問。

②家庭の状況

- ・家庭の状況が兵隊経験に影響している事例もあるので学生として召集されるまでの家庭の状況についての質問。

③学校生活

- ・台湾では1925年より学校の中で軍事訓練の時間が設けられていた。学生生活について質問することで軍事訓練の思い出などが出てくるのではないかと推測し、学生生活についての質問。

ご本人の意思のより、国民学校時代と嘉農時代とに分けて記載。

- ・台湾の聞き取り調査では欠かせない「戦後」について、学校関連の戦後の話題についても触れた。

④志願兵制度

- ・当時台湾では志願兵制度がとられており、志願するのが当たり前であったという事例もあるが、対象者は志願することなく召集されたので、志願兵についての質問。

⑤「嘉農隊」について

- ・聞き取り調査の中心である、「嘉農隊」について質問。
- ・「嘉農隊」と同時に編成されたとみられる「嘉中隊」についても質問。

⑥「嘉農隊」についての基本情報

- ・「嘉農隊」への入隊方法
- ・部隊編成
- ・任務

⑦「嘉農隊」での様子

- ・台湾人学生以外の召集状況
- ・食糧事情
- ・言語
- ・敗戦時の状況

終戦間際の日本は食糧難であったが、台湾では比較的食糧事情は良かったと言われている。

その実態についての質問と教えられた「日本語」と母語である「台湾語」2つの言語が存在していた中で、軍隊という命令系統の中ではどちらが使用されていたのか知るための質問。

⑧戦後

- ・台湾で、聞き取り調査をする際に欠かせないのが戦後についての質問である。戦後の歩み方によって聞き取り調査の回答は大きく変わってくる。

⑨「日本精神」

- ・嘉農には、「嘉農精神」という言葉が存在する。日本語世代の語りの中でも度々登場する「日本精神」という言葉と交えての質問。

⑩最後のまとめ

実際の聞き取り調査は、事前に上記の理由で選定した10項目（聞き取り調査結果の太字部分）に沿って進めた。聞き取り調査結果の箇所は質問項目に対応した形で記載している。

—聞き取り調査結果—

① 年齢、出身、当時の所属/年齢、出生地、当時所属の単位

昭和3年生まれ、89歳、台湾新港出身、命部隊所属、学徒兵はあの部隊（満州からきた）に編入された。昭和20年1月14日。陸軍第71師団、師団長：遠山昇。学徒兵が部下に編入された。命部隊という満州から来た部隊。

・嘉農に進学した理由/進入嘉農学校の理由

小学校へ入ったときは皆が義務教育であり、義務教育というと適齢期になった8歳になったら学校へ入らないといけなかった。僕らの年になって義務教育の国民学校へ変わった。たくさん本島籍の生徒がいて、校舎や先生が足りないから、内地から運動が好きな若い先生が来ていた。新しいスポーツを教えるため、野球を教えてくれた。遅れていたから新しいスポーツにあこがれて、小学校を出たら、嘉農に入って野球をやろうと思った。もう一つの理由、嘉農は就職に問題がなかった。嘉農は企業の方が物色に来ていて、就職に有利であった。水利組合や製糖会社など。就職口が見つかるという理由で、みんな嘉農に入る。あこがれる。あこがれるから、嘉農は、厳しい試験があった。筆記試験、口頭試問、体力測定もあった。エリート学生を選んで合格。150名採用だった。日本人も4分の1だった、本島人が多く、原住民は戦時中で交通不便でいなかった。沖縄人は3~4人いた。

・嘉農に進学した時点での将来設計（卒業したら何をするつもりだったか）/進入嘉農的當時的
未来規劃（卒業後打算做什么）

比較的生活に困らない裕福な家庭だったから日本へ留学するつもりだった。医者になりたい方が多かった。あの時、台湾の農家は裕福な家庭が多かった。当時、日本政府は農業に対して補償を行っていた。1キロに対していくらかの補償があり、みんな一生懸命に働く。お金を持っている人は教育資金にし、日本へ留学する。（たくさんいた）

② 学生動員されるまでの人生/動員前の人生

・家庭状況、学歴、教育状況/家庭状況、学歴、教育情況

家庭状況は比較的裕福であった。暮らしに困らない。学歴は、新港国民学校から嘉義農林へ受かった。全部日本語の教育。国民学校時代は内地から来られた先生が嘉農に合格するよう、宿舍で夜遅くまで補習をしてくれ勉強を教えてくれた。そのおかげで試験に合格したんじゃないかと思う。嘉農では、2年生まで伝統的な嘉農の教育を受けた。厳しく、嘉農精神だった。昭和16年（1942年）入学。入学した当時は、大東亜戦争が始まったちょうど翌年の4月に合格した。

③ 学校生活について/學校生活

・一番印象に残っていること/印象最深的事情

国民学校時代

非常に愛のこもった先生ばかりだった。戦後も非常に僕たちを可愛がってくれ、家族のような存在だった。戦後はいつも家族を連れて台湾へ来るし、台湾の名物を送ったりする。親子のような存在。

嘉農時代

厳しい。特に実習が厳しかった。あの時の農業は機械もない、除草剤などもない。坊ちゃん育ちの新入生には1年生から一番大変なところをやらせる。鍛える、経験させる。太陽が熱い、パンツ1つで跪いて田んぼをかき混ぜる。下からは暑い蒸気、上からは太陽。有機肥料がなく、畜産の糞を担いで、ぶつけて、肥料を作っていた。臭かった。嘉義農林には演習林があった。山奥に林場があり、一週間の順番で実習へ行く。これが辛かった。

軍事訓練があった。戦時下で厳しかった。軍事教練は、現役の将校（軍部が派遣した将校）が1人、予備役の将校1人。軍の将校は1年生に厳しく、集合が遅い、整列が乱れているとかうるさい、武力制裁しない代わりに向山まで回って来いとか、2～3Kmのグラウンドを走らされる。配属将校は干渉しない。学校での軍事訓練は学徒よりも厳しかった。待機中、時間を決められた軍事教練、待機の合間に陣地構築。学年別で、1・2年生は銃を持たない訓練、3～5年生は銃を持つての訓練・演習。

・戦後、同窓会などはあったか/戦後有沒有舉行同學會？同學中有沒有日本人？

同窓会あった。やりました。日本人もいる。嘉農の同窓会は今でも毎年12月の第一土曜日に必ず同窓会がある。去年もやった。とても盛大、1年に1度の行事、研究成果を発表しあう。同総支部、関東、関西支部もある。ベトナムにもある。本部から各支部に案内が届く。大会を開く。表彰式などもあり、騒ぐ。

・日本統治時代、しっかりとした教育課程を学ばれていると思うが、それが戦後どのように役にたったか。/日治時代受過的教育，學習的内容在戦後有派上用場嗎？

3年生から空襲があり、学科の授業を受けられなかった。飛行場の奉仕作業、煙台作り、土台作り、勉強ができなかった。4年では学徒動員された。教育はあまりなかった。

④ 志願兵制度が施行されたとき、年齢に達したら志願しようと考えていたか。/志願兵制度開始當時，若您已到可志願的年齡，會選擇志願嗎？

兄は志願兵。適齢者は志願という名目の徴兵。兄は徴兵が正しい。

・例えば原住民は、皆が志願するのが当たり前であり、志願しないと冷たく見られたという例もあるが、耳にしたことがあるか。/比方說，原住民志願當日本兵是理所當然的事，如果不志願的話會被他人冷眼以對，請問您聽過像這樣的事情嗎？

本当に当たり前のように行く。断りたい。あの時、断ることはできない。徴兵と呼んでいた。志願兵に行くと改姓名をする。改姓名をしている。(平山)

⑤ 以前、いただいた本の中で、嘉農隊と嘉中隊という言葉が出てきているが、具体的に教えて下さい。/以前您給我的書中有提到嘉農隊與嘉中隊這兩個詞，可以請教它們具體的內容嗎？

・嘉農隊とは？/嘉農隊是怎麼樣的部隊？

命部隊の学生隊 嘉農：対戦撃滅部隊・中埔

同じ命部隊だけど、駐在所が分かれていた。みんなで嘉農隊、嘉中隊と呼んでいた。ただ駐屯先が分かれていた。部隊名は、嘉農隊は杉山小隊。学生隊は教官がなく、予備役の先生を招いた。予備役の先生は、元女学校の校長で、女学生を相手していたから優しい先生だった。分隊長は1つ上の期卒業した先輩、小隊長は2期上の卒業生。現役軍人はいなく、学生と予備役ばかり。みんなは嘉農隊と呼んでいた。入隊当初、大隊長が、私たちを嘉中の運動場に呼び出し、訓示する。宣言された。そちらは全員特攻隊である。アメリカが上陸した場合、勲章を与えられるのは学徒隊である。と宣言される、だから第一接線で特攻隊のようにやっているつもりだった。対戦撃滅部隊とは爆弾を抱いて、アメリカ軍の戦車を撃滅するという任務。命令がでたら死ぬつもりだった。1個小隊、待機していた、陣地構築は山の上で、練習時間を除いてそれをやっていた。

・嘉中隊とは？/嘉中隊是怎麼樣的部隊？

嘉中：夜間斬り込み隊・中角

日本人が大部分だったでしょう。

⑥ 嘉農隊について/關於嘉農隊

・嘉農隊にはどうやって入ったのか？/是如何加入嘉農隊的？

(学生全員が入ったのか、学年で差異があったのか、形式的にしる何か「志願」した/させられたのか、親の同意はあったのか) /學生全員都必須加入嗎？有沒有學年的差異？加入部隊是一種志願嗎？需要父母的同意嗎？

4年生は無条件に全員。赤紙も何もない。●月●日に集合しろ(3月ごろ)。簡単な恰好で行った。任務も知らず集合して命部隊の隊長から聞いて初めて知った。僕らは学生だし、友達と一緒にだから遠足だと思っていたら、兵隊へ、学徒兵へ。みんな特攻隊。2等兵。軍事訓練に使った銃を持っていた(使えないもの)。集合する前に任務は分からない。召集して、大隊長から聞いて

て知った。みんな特攻隊。身体検査などもなかった。クラスみんなが一気に連れていかれる。嘉農入学前の試験で身体検査があったから、体格などはクリアしていたと思う。本当の徴兵は身体検査を受けなくてはいけなかったけど、みんな健康だと思ってなかった（健康なので、検査がなかった）。

・嘉農隊の部隊構成はどうなっていたのか？/嘉農隊の部隊構成

（中でどのような小隊や分隊などにわかれていたのか、学校の先生と配属将校はそれぞれどう関与したのか、蔡先生はどんな班に入ったのか）/有細分成小隊或分隊嗎？學校老師與配屬將校各自與部隊之間的关系？蔡先生配屬於什麼樣的班？

1個中隊：小隊が3つ。1分隊が10数名、4分隊で50人くらい。全部で150名。1個小隊50人くらい。写真の小隊は、待機と陣地構築をしていた。上層部との連絡は、本部である中埔（50名）その他、龍山脚（50名）と石頭厝（50名）。あの時は3クラスだったから3つに分かれた。



【口述対象者、蔡清輝氏より提供】

・嘉農隊の任務は何だったのか？/嘉農隊の任務是什麼？

（任務—全体・蔡先生たち—は何だったのか、装備は何があったのか、戦闘訓練はしたのか、ど

ここに配属されたのか) /任務整體中、蔡先生負責什麼樣的任務有?有什麼裝備?有沒有戰鬥培訓?

陣地構築、対戦車撃滅(特攻)、待機。仲の良いクラスメート、クラス別。何もしていない、飯ばかり食べていた。配給制度で軍隊はまだよかった。ごはんを食べていた。食料は限られているけど、十分だった。対戦車訓練をした。爆弾をもって戦車にぶつかる。練習したし、実弾射撃も見た。爆弾をもって戦車にぶつかるとはできないこと。

⑦ 嘉農隊の軍隊での様子/嘉農隊の情形

・他にどのような人が一緒にいたか。(志願兵、徴集兵、日本人) /嘉農隊の人員構成を? 比如說, 志願兵、徴集兵或日本人

現役兵隊は一人もいない。17、8歳。生徒だけの学徒隊。日本人は嘉農の同級生メンバーだけ、2個中隊に本部がある。本部は、補給、配分、食料、飯炊きを準備する。僕らの飯は2キロの山道を登って、本部で食べる。本部には配属将校がいた。配属将校がキャプテン。

・食糧はどうしていたか。/食糧的情况怎麼樣?

困っていなかった。飯だけは困らなかった。野菜は自分たちで植えていた。

・台湾人同士での会話における使用言語および状況/台湾人之間會話中使用的語言與情形

日本語、常用語だった。家に一回帰ってきた(3~8月の間)、休暇をもらって。家では台湾語。親が話せないから台湾語。

・日本の敗戦をどこでどのような状況下で知ったのか。/是在什麼樣的情况下知道日本戰敗的

兵の中、兵舎で知った。終戦間際にマラリアにかかっている、陸軍病院で知らせを初めて知った。除隊して、抱き合って泣いた。突然の終息で予期もしていなくて。すぐに光復というから、喜び半分、将来への心配半分、日本人がかわいそうだ。50年離れて台湾に来て、日本に帰っても親戚もいない。

⑧ 戦後について/有關戦後

・戦後、日本に対して何か感情はあったか。/戦後、對日本是什麼樣的想法?

恨みなんてない、恨みないばかりか非常に感謝する。不毛の地を50年の間、インフラ整備して、製糖の殖産などをしてくれた。みんな裕福にできた。ただ、残念に思ったのは、なぜ戦争に引っ張り込んだのか?それが分からない。どうして戦争をしないといけなかったのか、と思う。原子爆弾で日本の方も犠牲にしなくて済んだのに。

⑨ 「日本精神」という言葉について/關於”日本精神”

嘉農精神。嘉農精神について今論文を書いている。日本文で書いている。若い台湾の青年にも分かるように中文でも書いている。嘉農精神は先生方の指導によって長い間培養されてきた。①民族協和、一視同仁の精神。日本人、原住民区別のない精神。例えば野球、実力があればいい、区別なくポジションが与えられる。甲子園で準決勝のとき、同じ目的のために三民族が一緒に頑張る姿。伝統を受けて、みんな仲良く。今でも日本から来る。これがその他の学校に比べて嘉農は強い。目的のために三民族共生する、伝統を受けて仲良くする。②農業精神、嘉農は入学時に仕込まれる。苦勞に耐える、勇気をもって、目的を達するまでは放棄しない。農業の精神。1年生からの修身の授業：柔道、剣道が必修科目。必修科目の前に正座をする。和平の八徳、正座を仕込まれる、息もできない。教務主任自ら講義して正座する。徹底的に仕込まれる。八徳。これが、みんなが持っている精神。先生を尊敬する精神、部下をかわいがる精神、学術と技術を合致させた精神。その精神があつて卒業後は、台湾經濟に貢献。

⑩ 最後に、日本の教育を受けて、学徒兵となったという経験は人生の中でよかったと思えるか。

/最後、接受日本の教育、作為學徒兵的经验在您的人生中可說是段好的经验嗎？

とてもよかったと思う。日本が当時しなかったら今の台湾はどうなっているのか。日本が来なかったら未開の地だった。生活がアップし、みんなが教育を受けられる。不幸なことに戦争でぺちゃんこになったが、基礎があつて戦後の動乱から盛り返した。学徒兵を経験し、戦争は絶対にいけないことだと学べた。家庭を犠牲にして、戦争が意味のないことであると身をもって実感できた。特別攻撃隊なのに、なぜ正式軍籍がないのか。籍もないのに、特攻隊。嘉農は死亡者がいなかった。戦死したら、それは犬死だ。兵士籍がないのはおかしい。

まとめと今後の課題

対象者蔡清輝氏は、戦後日本政府に兵籍を求めているが、その要求は認められなかった。聞き取り後に日本で行った調査において、国立公文書館つくば分館所蔵「留守名簿 特設警備第 511 大隊・台湾第 13871 部隊（学徒）」から蔡清輝氏の召集についての手がかりをつかんだ。

「留守名簿 特設警備第 511 大隊・台湾第 13871 部隊（学徒）」には、編入日、地区、個人の住所、本籍地、身内の氏名（父・母・兄・妻など）、本人の氏名、生年月日が記載されている。蔡清輝氏は、本留守名簿に 1945 年 3 月 20 日、特設警備第 511 大隊第二中隊に歩兵として編入されたことが記録されていた。

既存研究の中で特に注目されることのなかった嘉義地区の学生は、留守名簿に学徒特設警備部隊の歩兵として記載されているにもかかわらず、自らその実態を知る術がなかった。そのため聞き取り調査だけでは、対象者が「学徒特設警備部隊」であることは判明せず、日本政府の公式資料を

以って明らかとなった。

本稿での聞き取り調査で、嘉義地区の学生動員を明らかにする一助となる証言を得ることができたことは大きな成果である。これまでに空白となっていた「学校単位動員」の実態解明の一助となり得る。今後、聞き取り調査で得た証言と公文書館留守名簿の調査を継続し、今までの研究で明らかにされてこなかった学徒特設警備部隊と嘉義地区の学生動員について調査を行っていく。

参考文献

日本語文献

高橋英男(1998)『台湾における「学徒兵」召集の実態とその法的背景』美巧社

台中歩兵第一聯隊史編集部(1988)『台歩一史「軍旗はためくところ」』

中国語文献

蔡武璋(2014)『永遠的嘉義農林/嘉義大学 KANO 棒(野)球魂』嘉義農林 KANO 棒(野)球部 OB 会出版

謝濟全(2009)『山子頂上的草根小紳士 日治時期嘉義農林學校之發展』稻鄉出版社

台灣總督府職員録系統 <http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action>

李明仁 吳慎德(2009)『椰影・金穗・野球情』國立嘉義大學 98 年度校慶暨嘉農創校 90 年記念特刊』國立嘉義大學校友會